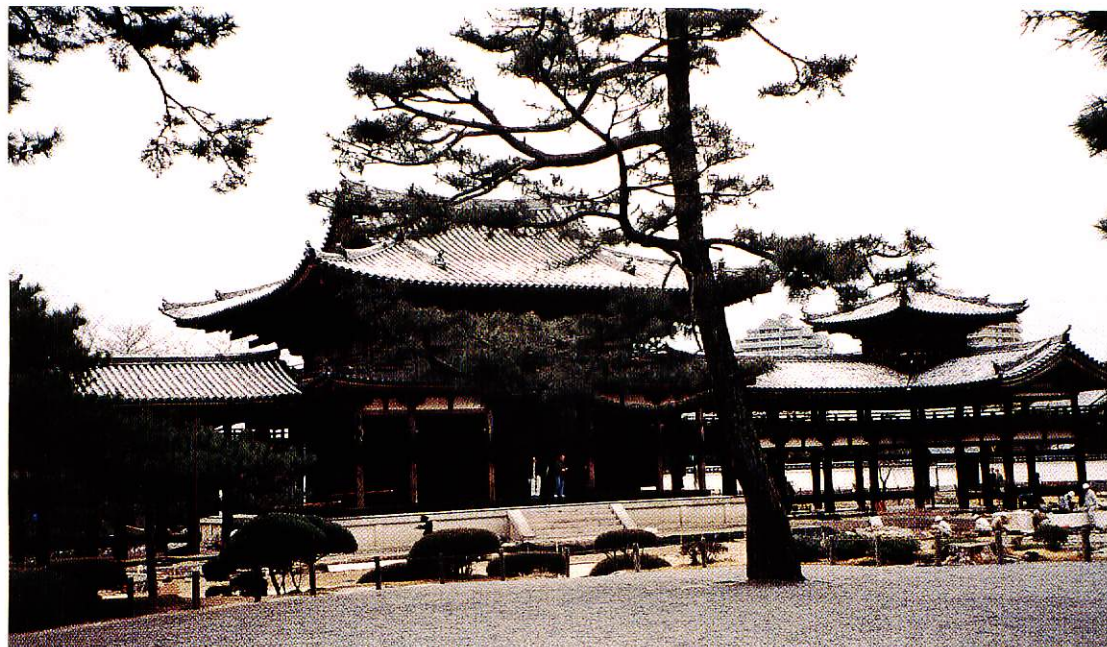


■ 北海道情報大学学内報



(京都・平等院)

● 目 次 ●

英国留学こぼれ話 学長 大野公男 ……2	主要行事 ……12
平成13年度合宿研修を終えて ……3 学生部長 坂上修二	広報活動 ……12
着任にあたって ……4~11	編集後記 ……12

発行・北海道情報大学
 〒069-8585 江別市西野幌59-2 TEL011-385-4411 FAX011-384-0134



英国留学こぼれ話

学長 ^{おお} ^の ^{きみ} ^お
大野 公 男

紀元2001年度は、北海道情報大学の歴史に残る年度である。情報メディア学部が誕生し、13名の教員が新しく、この大学のスタッフに加わられた。

“college”を単科大学、“university”を総合大学とするのは必ずしも正しくはない(英国には、“University College”という名前の“college”が存在する)が、“university”が“college”より大きな概念であるのは、確実と思われる。今や2学部、3学科を擁し、1学年の学生定員が、200名から380名とほぼ倍増した本学が、その英文名に、より相応しくなったと言うことが出来よう。

情報大学の次に挑戦すべき課題は、海外との交流の強化であろう。現在は夏休み期間中に、十数名の学生が南京大学で中国語の研修を受け、後は西安、北京などの観光をする、ほぼ2週間の旅行が唯一の本学の海外との交流となっている。未だスタートして3年目だが、この旅行が継続しているのは、玉置先生の個人的努力に負うところが大きい。

さて、この小文では、1957年に私が英国に留学した際のエピソードを綴らせていただくことにした。44年も前のことで、古い古い英国の話である。

当時の英国の貨幣制度は、甚だ複雑だった。1ポンドが20シリング、1シリングが12ペンス、そのうえ、半クラウン(2.5シリング)、半ペンスなどという硬貨もあった。(しかし、流石の英国人も遂に閉口したらしく、1971年に1新ポンド=100新ペンスに移行して、現在に至っている。)お釣りの勘定の仕方も、品物の値段から出発して、硬貨なり、お札を足して行って、合計が差し出した金額に達したところで止まる。普通の商店でも郵便局の窓口でも、足し算はするが、引き算はしないようであった。この点は、現在のイギリスではどうなっているかしら?

日本語と英語とは相性が悪いように思われる。一例を挙げると、吾々の、「ラ、リ、ル、レ、ロ」の子音は、英語の、「R」と「L」との間にあるのではないかと思われる。

私は最初の半年を、イングランドの東海岸、スコットランドの境に近い、Newcastle upon TyneのKing's College, Durham Universityで送り、後の1年は、招聘してくれたMcWeeny博士の転勤に伴って、イングランド北西部のNewcastle under Lymeにある建設中の新大学、University College of North Staffordshire(現在のUniversity of Keele)で過ごした。この大学で、数学のJim Wiegold博士に出会った。彼は大変親切な人で、週に一度、午後2時間位をかけて英会話のレッスンをしてくれた。彼に教わったのは英会話ばかりではない。或天氣の悪い日、“This British Weather is terrible”と言ったら、真顔で、“We are in England. You cannot complain about British weather”と言う。ちなみにGreat BritainはEngland, Wales, Scotlandからなり、Northern Irelandを含まない。

以下次のような会話が交わされた:

“I'm sorry. You are from Wales. How about Welch weather in this season?”

“As a matter of fact, it is worse.”

当時東大の研究室の先輩が、Bristolの大学に滞在されていたので、週末に訪問し、一夜を語り明かしたことがあった。その次のレッスンが始まるや否や、彼は悲しそうに言った、

“Kimio, your English is gone.”

もちろん英米人は、アクセントを付けずに話すことが苦手である。だから私の姓は、“Oh, No”になってしまい、名は、“キイ ミオ”か“キム”になり易い。

翌年夏の初め、帰国のため、Keeleを離れる際に、Jimはバス停まで送ってくれ、動き始めたバスを追いながら、高く手を振ってくれた。

Jimは一度学会出席のため、札幌に来たことがある。自宅にはベッドがないので、クラーク会館に泊まって貰った。そして、毎年、長いクリスマス・レターが届く。こちらからの返事は段々短くなっていくのであるが。



平成13年度 新入生 合宿研修を終えて

学生部長 情報メディア学部教授 坂上修二

平成13年度の4月から本学に情報メディア学部が開設されるに伴い、これまでにない多くの新入生を迎えることになりました(経営情報学部の新入生と合わせて482名)。このように多くの新入生を迎えたことは大変喜ばしいことであり、例年にも増して新しい期待と意気込みを感じております。

今年も例年通り4月の9日(月)、10日(火)の二日間にかけて、ビッグイベントの新入生合宿研修を実施しました。なぜビッグイベントと言うか、もうお分かりかと思いますが、新入生と引率の教職員を合わせて500名を越える人間が一度に合宿研修を行うからです。これまでは総勢200数十名で合宿研修を行っておりましたから、今年はその倍になったわけです。昨年の内から今年度は500名位の人数となることが予想されていたため、合宿研修の実施を危ぶむ声が時折上がっておりましたが、前学生部長の立花先生と学生委員の先生方、および学生課(教務課)の方々により合宿研修の計画が綿密に立てられ、実行に移すことができました。

さて、それでは合宿研修の状況をざっと述べたいと思います。9日の午後1時に新入生で満員の松尾記念館の講堂において先ず全体研修が始まりました。そこでは『合宿研修の意義と学生生活上の諸注意』、『初めての大学教育』、『教職課程』、『履修登録』、『図書館の利用法』、『実習室の利用法』などについて担当の先生方から説明・アドバイスがあり、新入生は初めての話なので熱心に聞いておりました。全体研修終了後学科別オリエンテーションに移り、二つの大教室において学科主任、学生委員の先生方から学科の履修モデルに基づき学科の教育内容などについて説明がありました。その後、新入生は講堂において体育系運営委員会主催による熱のこもったクラブ紹介と蒼天祭実行委員長の『檄』を受けましたが、比較的静かだったように思います。しかし、クラブの代表および蒼天祭実行委員長の熱意は十分に伝わったはずで

す。午後4時半頃、バス16台にて定山溪ホテルミリオーネに向けて出発、同6時近くに到着、夕食会

場へ集合。今年は学部毎に二つの会場に分かれて夕食をとることになり、大野学長先生も挨拶のため二つの会場を慌ただしく移動されるなど例年とはかなり異なる様子となりました。夕食はバイキング形式でしたので学生の皆さんは量的にも十分に堪能してくれたと思います。

夕食後、8時からクラス別ガイダンスが始まり、先ずクラス担任から大学教育を受ける意味、勉学の目標、および学生生活上の諸注意などについて話があった後、学生の自己紹介、クラス代表の選出を行いました。このクラス代表はこれからの体育祭や大学祭での実行委員として活躍することになりますので、これまでの実行委員不足が解消され、体育祭や大学祭の運営が円滑化されるものと期待されております。

翌日9時から再びクラス別ミーティングがあり、履修上の注意についてクラス担任から説明を行いました。新入生の皆さんにとって科目の履修方法、科目の選択が当面する最大の問題であったと思います。また、今年度から教職課程が開設され、単位の修得、科目の履修・選択が更に複雑になっております。このため、履修上の注意だけを行うクラス別ミーティングを設けたことは新入生にとって大変良かったと思います。ミーティング終了後、大学に向けて出発、昼過ぎに到着ということで無事合宿研修を終了しました。

今回の合宿研修で新入生の皆さんの疑問や不安を全て解消できたとは思えませんが、科目履修に関しては前述のように研修2日目にもクラス別に説明する時間を設けたので、かなり理解して貰えたのではないかと思います。この学内報が出る頃には新入生の皆さんの大学生活はもう軌道に乗っていると思います。どうか初心を忘れず、自分の価値を高めるよう、目標を持って4年間の大学生活を有意義に過ごされることを心より願っております。

最後になりましたが、500人以上という大人数の合宿研修を実施するに当たり、ご協力頂きました関係各位の皆様へ深く感謝申し上げます。

よろしくお願ひします

本年4月1日付で、13人の先生が新たに着任されました。簡単なプロフィールや趣味等を含めて戴きながら自己紹介をお願い致しました。(掲載は五十音順)



経営情報学部 講師

石井 勝

昨年9月のことです。正門を入ったところの校舎案内板で本部棟を探していました。その時、一人の男子学生がそばに来て、「どちらを探していますか？」と声をかけてくれ、目的の近くまで案内してくれました。本学のキャンパスをはじめて訪れた私にはとても嬉しい出会いでした。この大学生の一声は、私に「北海道情報大学」への関心と期待を大きくさせてくれました。そして、「北海道情報大学のためにがんばろう」という思いを強くしました。

本年4月から、情報学科に所属させていたが、教職課程を担当しております。期待に違わない学生諸君と、これからの教育について楽しくディスカッションしております。

高等学校においては、平成15年度から普通

教育に関する教科として「情報」が新設され、必修となります。専門に関する教科としても、「福祉」とともに新設となり、将来、農業科や商業科などのように、「情報科」の高等学校が誕生することでしょう。

昨年出会ったあの学生のような、本学で学んだすてきな諸君が、そのパイオニアとして各高等学校の教壇に立ち活躍されることを願い、微力ながら全力を尽くす所存です。

ところで、コンピュータなしでは教材準備もままならない昨今です。学生からは、「連絡にはメールが便利です」とアドバイスされたりしています。この最適な環境の中でしっかり学びたいと思っております。何分初心者ですので、諸先輩のご教示をよろしくお願ひいたします。

また、私の趣味は囲碁(20年前の日本棋院初段)と、藻岩山や円山などに登り持参のビールで喉を潤すことです(夢は富士登山)。同好の方がおられましたら声をかけていただければ幸いと思っております。

公私ともにどうぞよろしくお願ひいたします。



経営情報学部 教授

尾崎 弘之

私は後志管内の小さな山村に生まれ、高校を卒業するまでの大半を、羊蹄山麓で過ごしました。子どもの時に毎日山や川で遊んでいたせいか、今も山や森の中に入ると、なんともいえない心の安らぎを覚えます。趣味は野山の散策と溪流釣り、終の住みかも野幌森林公園のそばに定め、日々野鳥の姿やその囀り

を楽しんでいます。

教師であった父の影響もあって、ごく自然に教職の道に入り、今日まで42年間、高等学校教育に関係する仕事に携ってきました。それは、学校での12年間の教壇生活をはじめとし、研究機関や行政機関での14年、学校経営に当たった11年、さらに大学で教職課程を担当した5年間という比較的变化に富んだものでした。

今年4月、私の13番目の職場に当たる本学に迎えられ、教職課程の講座を担当しています。少子化が進み本道においても選考検査の倍率は二桁台になり、検査の内容も高度で多様なものになっています。教職への道は年々厳しさを増していますが、これまでの経験も生かしながら、教師を志望する学生の良き支援者になりたいものと思っています。

ところで、進学率が高まり、高等学校が国

民的教育機関と言われて久しくなりました。学校教育は、施設・設備も充実し、量的には目覚ましい発展を遂げることができましたが、その一方で、顕現化した教育の荒廃や病理現象が深刻の度を増し、これまでの教育の質的転換が強く求められています。また、激しく変化する社会、それに伴う生涯学習社会等の到来は、学校教育に対して新しい視点からの改革を求めています。

激動の社会をたくましく生きていく力を育てる教育、生涯学習社会における学校教育の役割、その役割を果たすための教育の制度・内容・方法、求められる教師の資質・能力とは？問題が山積しています。過去からの声に謙虚に耳を傾け、将来を展望する中で、教師であるための学びを学生とともに続けたいと思っています。



情報メディア学部 教授

加納 邦光

北海道の室蘭出身です。室蘭は雪が少ないので、子供の時はもっぱらそりとか竹スキーで遊びました。横断する道を幾つもそりで滑り抜けても、車に轢かれる危険をあまり考えないですむ時代でした。その他の季節では、剣術ごっことかビー玉とかパッチなどをして遊びました。つぎはぎだらけの服を着て、泥だらけの少年でした。高校時代はチビで貧弱な体格でしたので、女の子には絶対に縁がないと固く信じ、劣等感にさいなまれた暗い、暗い青春でした。大学は仙台でドイツ語、ドイツ文学を勉強しました。大学一、二年の頃は寮生活で、勉強にはあまりなりませんでしたが、全国の友達と語り合い、視野を広げる

ことができたように思います。しかしこの頃から弱いのに酒を飲み過ぎたため、今ではあまり酒を飲んではいけない体になってしまいました。何ごともほどほどにしないとイケないものですね。

ドイツ語やドイツ人をとおして学んだことは、良い悪いは別として、日本人が「グループ意識」を大事にするのに対して、欧米では各個人が自分の言葉や責任を自覚して行動するというのでしょうか。私はどうも機械に弱く、ワープロでもコンピュータでも論文を数十ページも消してしまい、復元できなかったことがあります。そんな私ですが、この大学で皆さんと共に学んでいきたいことは、皆さんが専門のコンピュータによる勉学を大切にしながらも、同時に自分一人で生きているのではなく、他の人々と共にこの社会を担っているという自覚を更に培っていく、そんな願いをこめてドイツ語の授業を進めていきたいと思っています。



情報メディア学部 講師

齋藤 一

私が、北海道情報大学大学院経営情報学研究科を第一期生として修了し、早、三年の月日が経ちました。その間、本学では松尾記念館が完成するなど、施設も内容も年々充実してきていることを実感致します。更に本年、待望の『情報メディア学部』が新設され、その教員の一人として本学に戻ることができたことは、筆舌に尽くしがたい喜びです。着任にあたり、自己紹介を兼ねまして、私の研究について少々説明させていただきます。

私が、修士の学生のころから研究しているテーマは、人間と人間、人間とコンピュータとの『協調』を支援することです。当時の私は、コンピュータは「何でもできるもの」と思い込んでいました。しかし、少なくとも現段階では、コンピュータが人間と同様に問題を知覚し、その上で思考を行って何らかの問題解決を行うことは

非常に困難です。また、『人間』という観点を外して、人間の役に立つシステムを創ることなどできないということに気が付きました。

そこで、コンピュータが自身で問題を解決するのではなく、人間(人々)の問題解決を支援するという立場で研究をするようになりました。中でも最近、地理的に点在する複数の学習者が、インターネットに接続されたコンピュータを介して協調的に問題解決を行い、学習を進めることを支援するシステムに興味を持っています。

今後は、上記のテーマに加えて、『北海道情報大学』ならではの研究を追求していきたいと考えており、具体的には、北海道という地域に関わる情報を目的に合わせて効果的に視覚化する方法を検討しております。

私は本学で、『学問は大変だけれど楽しい』ということを教えて頂きました。これからは、学生諸君とその楽しさを共有していきたいと考えています。また、学生と一緒に悩んで、一緒に問題解決をしていきたいと思っています。

最後になりましたが、教職員、学生の皆様、若輩者ですが、今後とも宜しくお願い申し上げます。



情報メディア学部 教授

新保 勝

前任の北海道大学には28年前に着任し、時に情報関係学科や専攻の基盤作りと整備、充実に携わってきました。今頃の季節は緑豊かなキャンパスでしたけれども、本学は野幌森林公園を後に控え、それに劣らず大変恵まれた自然環境の中にあります。大学としては新しいだけに、自由な発想をする若い人々の活

気が直に伝わってきます。また、規模が手ごろな大きさであるだけに、小回りがきき、教育や研究の面で面白い展開が期待できそうです。

専門分野は数理情報工学で、コンピュータを主体とする高度情報処理技術の内、人間とコンピュータとの知的なインターフェース機能の問題が中心です。基礎となる数学や心理学からコンピュータによる音声、記号・画像情報処理に至るパターン認識で用いる各種アルゴリズムの設計や解析、評価に関する研究を行ってきました。特に心理物理認識に関心があり、人間の視覚や聴覚の機構を幾何学的な立場で調べています。また、記憶はプロセスであるとの観点に立ち、脳の記憶機構の数

理モデルによる解釈も試みています。因に、幾何学は座標の取り方で変わらない性質を研究する学問で、強いていえば、見方が変わると消えてなくなるものは幽霊であるか、個々の例でしか成立たないとするものです。一度、こういう性質を明らかにできれば、電気機械や材料、信号、統計、音声と、いろいろな分野に関連する問題を統一的に扱えるので、潰しの利くやり方だともいえます。産業界が大

学に対して飯食う百科事典の養成といった知識重視の教育よりも、論理的な思考力や問題発見、解決のセンス、見識を教育せよというときの趣旨に近いでしょうか。

趣味はこれまでボンコツ車いじりやサイクリングなどの軽いスポーツ程度ながら、今は大学構内や近辺に咲くエゾノリュウキンカなどの草花、林立する樹木、飛び交う鳥の名を教わるのを楽しみにしています。



経営情報学部 講師

棚橋 二郎

4月1日から経営情報学部情報学科講師として活躍させていただくことになりました。棚橋二郎と申します。よろしくお願ひいたします。

自分は北海道情報大学2期生で、高校中退後大検経由で入学しました。中退した理由は色々あったのですが、(今思えば)些細な事で先生と衝突したのが最大の理由だったと思います。いや本当に些細なこと…でも、それは当時の自分にとって大変重要なことだったのです。

それ以来、「学校」や「先生」自体がずっと嫌いでした。そんなスタンスでいたので当然大学に入学した後も漠然とした時を過ごし、先生方には本当に多大な迷惑をお掛けしながら卒業し…いや本当に申し訳ありませんでした…。

卒業して2年間民間企業に勤め、その中で、「自分が」いかに不勉強であったかを思い知らされました。先生に教えを請うのが嫌いだった、というのは単なる言い訳で、結局は自

分で何もやっていなかったに過ぎない。そんな当たり前の事に気付かなかったのは恥ずかしい限りですが、そこで大学に戻ることを決意したのです。

思うに、自分は「学問」というものが何たるかを、判っていなかったに違いありません。もっとも、じゃあ今は判ったのか、と問われれば、「…すみません!」と答えるほかにないとは思いますが(苦笑)。

中岡教授や沢山の先生に支えられ大学院を修了し、2年間サーバ室2で色々貴重な経験をさせていただきました。特に、「教える」ことの難しさという試練が与えられたことは、かなり自分にとってプラスになったと感じています。

自分は、他の先生方のように輝かしい経歴があるわけでも、模範的な人間でもなく、自分は本当に「先生」と呼ばれても良いものかどうか、正直考えてしまう時があります。ただ、高校・大学と自分がパツとしなかった時期、何が原因だったかと言えば、間違いなく「対話が足りなかった」ことに尽きるような気がするのです。

千人の学生すべてと対話できるなんておこがましい事は思いませんが、なるべく多くの学生の原動力になれるよう、今後もさらに精進したいと決意を新たにす今日この頃です。



情報メディア学部 講師

中 島 潤

この度縁あって情報メディア学部の講師に着任することになりました中島 潤です。既に一ヶ月以上たちましたが、私立大学に勤めるのは初めてでしたので、前任の国立大学とあらゆる面で違いがあり、今までの常識が通用しないため毎日が驚きの連続でしたが、最近やっと事情がつかめて来た次第です。

私は北海道情報大学の数員のなかでも若い方の教員だと思いますが、私の世代は、丁度もの心がついた頃に「パソコン」なるものが一般家庭に入り始めてきた世代です。実際、私がパソコンと付き合い始めて20年になりますし、その当時（小学校時代）もパソコンで遊ぶことに何の疑問も抵抗もありませんでした。既に死語となってしまっているのかもしれませんが、かつて私は典型的な「パソコン少年」でした。

この大学の大半の先生は、いわゆる「大型計算機」と呼ばれるもので計算機技術を勉強された方が多いと思いますが、私と同世代あるいはそれ以降の先生は「パソコン」を元に計算機技術を学ばれた方が多いのではないかと思います。もちろん両者の計算機は計算アーキテクチャー的には何ら違いはありませんが、各々独自の思想・文化を持って発展してきました。

最近の大型計算機は、パソコンをはじめとする小型計算機勢力にすっかり駆逐されて影が薄くなってしまいましたが、私はこの大学で小型計算機勢力に匹敵するようなパワーで、パソコン世代が大型計算機世代を圧倒する教育・研究を実践してみたいという妄想とアイデアを幾つかもっています。もちろん当面はそのためのパワーを貯えることに専念したいと思いますが、新設の学部ということで私も大きな期待をもってやって来まし、今年入学してきた第一期生もそう思って受験したはずです。4年後、情報メディア学科を卒業した学生の皆さんが、さらなる次世代勢力を作るために必用なしっかりした土台をつくれる仕事をしていきたいと思っています。



情報メディア学部 助教授

隼 田 尚 彦

このたび新設された情報メディア学部の助教授に着任し、認知工学および行動工学を担当することになりました。私の専門は環境行動学という分野で、昨年度までは北海道大学の都市環境工学専攻の建築系研究室に所属していました。建築の人間が何故、情報メディアなのか？何故、認知工学や人間工学なのか？疑問に思われる方も多いかもしれません。

環境行動学とは、主として行動科学（心理

学や社会学を含む）・建築の両分野をまたがる学際的な学問領域です。私はその中で、認知工学を適用した環境認知の研究や環境認知をはじめとする環境行動学の諸理論に基づいた空間のデザインに携わってきました。情報メディア学部の目指す教育の中にはメディア・デザインも含まれますが、IT革命のもたらした情報メディアには、我々が今まで生活してきた日常空間とは異なるサイバー・スペースが広がっており、これらの「空間」のデザインには、環境行動学的視点は欠かせないものとなってくるに違いありません。

環境行動学では、多くの学問がそうである以上に日常生活の様々な疑問が研究のベースとなっています。物をデザインするうえで、使い勝手というものが非常に重要であること

は皆さんも生活の中で十分理解していること
 と思います。メディアのデザインにもまったく
 同じことが言えます。例えば、今ではあ
 たりまえになっているGUI (Graphical User
 Interface) は10数年前までほとんど普及し
 ておらず、XeroxのStarやAppleのMacintoshの
 みが採用していました。しかし、現在では
 GUIを採用していないコンピュータを店頭で

見つけることは非常に困難です。それは、「使
 いやすさ」が商品開発のキーワードとなっ
 ているからです。

皆さんには、これからの学生生活を楽しむ
 上で、好奇心を大切に、そして探究心を忘
 れないでほしいと思います。すばらしい発
 明や発見の多くは、日々の好奇心や探究心
 の賜物であるからです。



経営情報学部 教授

浪田 克之介

夏目漱石が英国に留学していた今から100
 年前は、英国と日本間の手紙のやりとりには
 数か月が必要でした。この状況は比較的最近
 まで大きく変わることはなく、漱石から70
 年後に同じ英国に出かけた小生の場合でも、航
 空便での往復に優に2週間はかかりました。
 むろん100年前と違って、緊急時には国際電話
 が利用でき、企業などではテレックスが使用
 されてはいましたが、FAXはまだありません
 でした。ましてや、今日のように誰もがEメ
 ールで連絡がとれるようになるなどは夢に
 も考えられないことでした。

この4月に本学に赴任しましたが、「IT革命」
 などという表現が使用されるようになるはる
 か以前に、「情報」の重要性を建学の精神に
 取り入れた本学の先見性に敬意を表し、学生
 諸君や同僚の教職員のみなさんとともに、新
 たな世紀の黎明を迎えることができたことを
 うれしく思います。

本学には、以前通信教育部が発足した頃、
 短期間でしたが非常勤で関わったことがあり
 ます。双方向の通信機能を持った衛星放送の
 活用など、その斬新な教育手段におおいに感
 心しましたが、これにさらに最新の技術が加
 味されれば、いっそう確かな教育効果が生ま
 れるものと思います。そのような知識と技術
 を体得できる学生諸君はたいへん恵まれた環
 境にあるといえますし、語学教育を担当する
 者としては、この本学の特色に日本語・外国
 語の力を伴わせて、社会で活躍できる人材が
 数多く本学から排出されるよう願っています。



経営情報学部 教授

藤家 壮一

いま地球上に存在する生物のなかで、生ま
 れてから独力で餌を捕り、自らを養えるよう
 になるまでに最も時間のかかるのは、おそらく
 ヒト族ではないでしょうか。ということは
 つまり、短絡的にいえば、ヒトは人間となる

ことを目指して不断に努力しなければ他の生
 物なみになれないということではないでしょ
 うか。

また、同種間で大量殺りくを行うのもヒト
 族ヒト科の生物だけではないでしょうか。と
 いうことはつまり、「なぜ他人(ひと)を殺
 すのは悪いのか」という、最近話題の問いか
 けが成立するのもヒト族だけではないでしょ
 うか。

さらには、地球環境の悪化を憂えて、「地
 球にやさしい」というスローガンが何か良識
 を示すもののように考えられていますが、炭

酸ガスや紫外線が増え、温暖化が進んでヒト族が絶滅しても、地球そのものがなくなるわけではなく、新しい環境に適した新しい生物が登場するなら、「地球にやさしい」とはあくまで「ヒトに都合がいい」というにすぎないのではないのでしょうか。

この4月からロシア語を担当することになった一介の教師でもこのようなことを考えています。将来はIT革命の一翼をになう学生緒

君にもぜひ考えていただきたいことです。

科学技術の進化は必然ですが、それは必ずしも手放しで喜べることではなく、むしろ避けようのないヒト族の業(ごう)のようなもので、しかもヒトの知恵はほとんど常に「あと知恵」であるという苦渋の認識に立つなら、日進月歩の科学技術と同時に現在必要なのは「謙虚さ」を土台とした新しい哲学の創出であり、真の意味での叡知ではないのでしょうか。



経営情報学部 講師

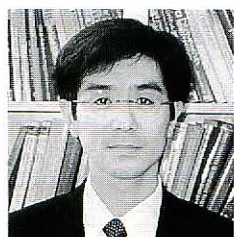
柳 信 一

今年三月まで北海道大学大学院の博士課程に在籍しておりました。在学中はパターン認識及び計算論的学習理論の分野の研究に従事しておりました。一貫して領域推定問題に関わる「学習問題」に取り組んでいたことから、人工知能全般に関心があり、特に機械学習に関する分野に興味をもっております。これからの研究目標として、これらの研究はもちろん続け、コンピュータグラフィックス等の世の中で流行している工学的な話題にも関心を持っていきたいと考えております。

次に教育に関する抱負について、近年、国内外における計算機の一般的な普及に伴い、情報工学技術者への需要が高まっております。専門職以外でも計算機の取り扱いを必要とする場合が多く、各企業や研究所は大学教育機

関に対して、情報工学全般の教育に大きな期待をよせていると思います。大学では技術と知識の教育に加えて、独自で試行、考察、および評価を行なえる主体性の教育が重要だと考えております。このような観点から、現在進歩し続けているコンピュータ技術の取り扱いに十分対応でき、かつ創造性と独自性を持ち合わせ、総合的な情報工学における分野の中核となる人材の育成を目標として、教育に励んで行きたいと思っております。

最後に、簡単な自己紹介をします。出身は北海道で、大学の学部に進学するまでは計算機とは縁遠い生活をしておりました。しかし、大学院への進学をきっかけに、工学的な研究に従事できる職業を希望するようになりました。また、自分や先人達の研究成果を将来を担う学生達に伝えていくことも非常に重要だと考えております。その意味で、教育と研究の両方に携ることのできる北海道情報大学の講師に就任できたことを非常に嬉しく思います。まだ社会人一年目の若輩者ですが、よろしくお願いたします。



情報メディア学部 講師

山 北 隆 典

ソフトウェアの開発、情報処理技術者教育、情報技術の研究という「産」、「学」、「研」の立場から企業人として17年間、情報に関わってきました。このたび縁あって北海道情報大学で教員として教育と研究に従事することができ、その責任の重さに改めて身が引き締まる思いです。

ももとはコンピュータや情報に関する興味は持ち合わせていませんでした。小学校6年生の時、「天文と気象」という雑誌をきっかけに天体望遠鏡を買ってもらい大接近中の火星や輪の大きく開いた土星、淡く輝く不思議なオリオン大星雲に魅せられ、天文学者になることを夢に見ました。高校生の時、数学を道具として自然界の振る舞いを記述する物理の面白さに魅了され、大学で物理学を学ぼうと決めました。大学では宇宙線を勉強しておりました。自然科学に興味を抱いてきた人間です。そして現在の趣味はというと、ゴルフと日曜大工、そして子供たちと遊ぶことでしょうか。

そのような私が工学の世界の扉を開いたのは社会人になってからです。ソフトウェア開発業務に携わり、ソフトウェア・エンジニアという仕事の難しさ、面白さを味わってきました。そして何よりも、毎日の業務・作業を工学的な目で理解できないため、本質が何な

のかわからない(したがって、身につけた事柄を「技術」として応用できない)、といった不安な日々を送ったことが思い出されます。この頃の経験は私の学習観、教育観に大きく影響しているように思います。情報処理技術者教育では、コースウェアの設計の仕事やディレクターとして教育ビデオ、教育番組の制作に取り組みました。また、3年間教壇に立ち、学生に情報技術教育や人間教育(?)を行ってきました。研究活動としては、本学に隣接する北海道情報技術研究所で学習システムの試作・研究に参画しておりました。それ以来、オブジェクト指向データベースやハイパーテキストといったデータ工学分野を中心に勉強を続けています。

今年度の担当科目は「情報科教育法Ⅰ」、「情報科教育法Ⅱ」の2科目のみですが、様々な機会に皆さんとお互いに切磋琢磨し高めあえるような時間を過ごせればと楽しみにしております。



情報メディア学部 教授

山 口 忠

この4月に着任した山口です。一言挨拶を記します。

室蘭工業大学を自分で定めた定年でやめ本学に勤めることになりました。年齢は、知り合いの小児科の医者から”還暦は子供に戻ることですからうちに来なさい”と誘われた通りの60です。やはり医者に薦められ晴れた日はテニスを、晴れた日と雨の日はスケッチを趣味にしております(何時仕事をするのでしょうか)。上の顔写真代わりがそれらの上手さ(下手さ?)を表わしています。

3年前から確率統計学の非常勤講師として

来ていましたので、本学の様子はある程度知っているつもりです。現在、講義は2科目4コマを持っています。その各々で話したことの繰り返しになりますが、私自身の講義の心構えを記して挨拶とします。

確率統計、情報数学いずれも表面的には人間味の少ない科目かと思います。しかし、説明や提示ではなるべく人間味くさくやりたいと思っています。時々真違うのもまた良しとします。更に、受講学生のバックグラウンドが比較的マチマチ(分散:大)と思われるので、“自給自足”の講義を目指しています。とは言っても無限後退は出来ませんので、受講生の反応を見ながらの判断で、行きつ戻りつします。無表情や無反応ですと、あ一分っているとしておこうと都合の良い方にとります。諸君を大学に通わせてくれている父母のことももって講義しています。諸君もその覚悟で。では教室という戦場で。

◆◇ 教職員の動向 ◇◇

☆ 法人本部 ☆

◇職員人事◇

(異動)5月1日付 総務課 小川 勝利

☆ 大 学 ☆

- 4月4日(水) 経営情報学部教授会
情報メディア学部教授会
全学教授会
- 6日(金) 入学式
(入学者 経営学科 119名
情報学科 148名
情報メディア学科 215名
大学院 11名)
- 9日(月) 新入生合宿研修
10日(火) /
- 5月11日(金) 経営情報学部教授会
18日(金) 情報メディア学部教授会
25日(金) 全学教授会
- 6月8日(金) 経営情報学部教授会
15日(金) 情報メディア学部教授会
22日(金) 全学教授会

☆ 通信教育部 ☆

<入学選考>

4月4日(水) 第8回入学者選考

<入学式>

4月13日(金) 第8回入学式

<地方スクーリングⅠ>

6月1日(金)～3日(日) 札幌
6月8日(金)～10日(日) 全国17ヵ所
6月15日(金)～17日(日) 福岡

<地方スクーリングⅡ>

6月22日(金)～24日(日) 全国15ヵ所
6月29日(金)～7月1日(日) 名古屋
7月6日(金)～8日(日) 水戸

<前期レポート提出期間>

6月25日(月)～7月2日(月)

◆◇ 4月～6月主要行事 ◇◇

☆ 法人本部 ☆

6月15日 高校教員対象本学説明会(本学)
6月19日～26日 / (旭川～函館)

◆◇ 広報活動 ◇◇

・高校訪問

4月～7月 道内主要高校
5月下旬 青森県主要高校

・進学相談会

5月29日～6月8日 道内7会場
5月24日～6月20日 東北等10会場

・校内ガイダンス

5月8日 厚岸潮見高校
5月23日 中標津農業高校
6月20日 旭川明成高校
6月21日 帯広大谷高校

・TVCM

5月7日～5月31日 HTB

◆◇ 主な来校者 ◇◇

5月22日 釧路北陽高校教員1名
5月23日 白樺学園高校教員2名
6月1日 石狩翔陽高校上級学校見学会
6月14日 札幌篠路高校教員1名
6月29日 石狩翔陽高校大学見学会

編集後記

新任の先生方や新入生を迎え、二学部体制で船出してから二ヶ月になります。ようやく新緑の季節となり、情報大周辺の自然環境の素晴らしさに目を見張っている方も多いことでしょう。しかし大学を取り巻く環境は春のうららかなさと反対に、実に厳しいものがあります。少子化で大学間の生き残りをかけたバトルが熾烈さを増す中、本当に必要なのはその場しのぎの場当たりの対策ではなく、確固たる教育理念と長期的展望に立った戦略でしょう。ただ、どんな戦略をたてるにせよ、個々の先生方の教育と研究両面での地力がなければ大学の魅力も生まれず、競争力もついてこないとしたものでしょう。ハード面もさることながら、まず「中味」で勝負できるように、ひたすら精進しなくては……。 (U)

北海道情報大学学内報

「ななかまど」第20号

発行日 平成13年7月1日
発行 北海道情報大学
編集 学内報編集委員会